

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02941

研究課題名（和文）発達障害等の子どもの食の困難と子ども・家族包括型発達支援システムの開発

研究課題名（英文）Developmental research on the construction of "children and families comprehensive developmental support system" to deal with children's food developmental difficulties

研究代表者

田部 絢子（Tabe, Ayako）

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：70707140

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：食は生きるための根源であり、生涯にわたり健康的な生活を営む基礎となる。発達期の食支援が重要であるが、当事者が抱える食の困難とその背景にある感覚過敏・低反応等の感覚情報処理の困難や多様な身体症状、日常生活において直面する困難や支援ニーズの全体像を把握するための実証的研究は緒についたばかりである。発達障害児の偏食等の食の困難は家庭・保護者の大きなストレスとなるが、相談・支援機関に繋がることができず、長く苦しむ事態がみられる。

本研究は調査研究等を通して、子どもの偏食・摂食困難等の食の発達困難に対応する「子ども・家族包括型発達支援システム」を開発することを目的とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

心身の複雑な協調を伴う摂食行為をスムーズに行うには「安心・安全・信頼」が不可欠である。「わがまま・臆や努力不足」等と捉えられてきた偏食・摂食困難もパラダイムシフトが不可欠である。子どもの偏食・摂食困難は子育てにおいて逃れようのないものであり、親子関係や愛着形成にも影響を与える。摂食困難を有する子どもへの理解と発達支援のあり方をデザインすることは、子どもの発達と教育を根本から見直すことであり、発達支援・子育て支援の観点からも重要である。

本研究課題は特別支援教育、歯科・摂食嚥下口腔リハビリテーション、栄養学の多分野協働による共同研究であり、国内外に類をみない。

研究成果の概要（英文）：Eating is the basis of life and the foundation for a healthy life throughout life. Although support during the developmental period is important, there is insufficient empirical research on the overall picture of food difficulties faced by the parties involved, the underlying sensory information processing disorders such as hypersensitivity and hyporeactivity, physical symptoms, and the difficulties and support needs they face in their daily lives. Food difficulties such as picky eating among children with developmental disabilities are a source of great stress for their families and guardians, but they suffer for a long time because they are unable to connect with consultation and support organizations.

Therefore, the purpose of this study is to investigate and research a "comprehensive developmental support system for children and their families" that addresses children's food developmental disorders such as food selectivity and eating disorders.

研究分野：特別支援教育

キーワード：発達障害 特別支援教育 食の困難 発達支援 本人・家族包括型支援

1. 研究開始当初の背景

食べることは、人間の最も基本的な営みであり、とりわけ発達初期段階において重要である(西香:1988)。近年、食物アレルギー、摂食障害、肥満などの子どもが増加し、食に関する支援の充実は重要性を増している。例えば、発達障害等の子どもには摂食機能に根本的な問題がないにも係らず、多様な食の困難な例が目立ち、それらと発達障害等の子どもの多くが有する感覚情報処理障害(感覚過敏・低反応)や身体症状(身体の不調・不具合)との関係が注目され始めている(高橋・増淵:2008、高橋・石川ほか:2011、田部・斎藤ほか:2015、高橋・斎藤ほか:2015)。発達障害等の子どもが有する困難は、社会性やコミュニケーション、限定的興味などを取り上げられることが多いが、生活を送る上で直面する各種困難の背景には、感覚情報処理障害(感覚過敏・低反応)、自律神経系、免疫・代謝の脆弱・不全に伴う各種の身体症状等の身体感覚問題、周囲の無理解・厳しい躰・叱責・いじめ・被虐待等に伴う「不安・恐怖・緊張・抑うつ・ストレス」等が大きな影響を与えていることが徐々に明らかになっている。特に食の困難との関係でみると、食物・料理・食器具・環境に関する過敏性、偏食、異食、肥満、アレルギー等の極めて多様な困難として現れている。

近年、数多く出版されている発達障害当事者の手記には、多種多様な「食の困難」に関する記述もみられる。例えば、ASD 当事者のニキ・リンコ/藤家寛子(2004)は「トマトやピーマンのように単色のものは気持ち悪くて食べられない」「形が違ったり、いびつだと気持ち悪くて食べられない」と色や形などに対する視覚の過敏を記述し、ASD 当事者のケネス・ホール(2001)は「ほとんどの食べ物はひどい舌触り」と食感の過敏から食べられないことを述べている。同様に、ASD 当事者のグニラ・ガーランド(2000)は「歯がひどく過敏だった」「顎のコントロールが上手くいかず、顎を動かすのは重労働だった」と咀嚼や嚥下の問題が原因で「何でも丸飲みし、ミルクで流し込んだ」と語っている。

「食べる」という行為は、自己の体内に「食物=異物」を直接的に受け入れることであり、本来、不安・緊張等を伴いやすい営みである。加えて新奇恐怖性、感覚過敏等を有する発達障害等の子どもには、まさに不安・緊張・恐怖・ストレス等を強める行為となりやすく、それによって拒否反応が強まった結果、限定された嗜好や極度の拒絶などの偏食や孤食として表れているとも推定される。「食べる」という心身全体の複雑な協調を伴う行為をスムーズに行うためには、基本的に「安心・安全・信頼」が不可欠である。「安心・安全・信頼」を築いていくためには、丁寧な関わりが必要であり、その上で改善に向けた対応や支援を行うことが大切である。食べさせたい側の意図・タイミングを優先して進めていくような関わりでは、状況を改善できないばかりか、悪化させる可能性も否定できない。このような発達障害等の子どもの食の困難は、保護者の子育てにおける不安・ストレスの要因になりやすい。小淵(2007)は「ぐずってばかりいる、なかなか寝付かない、ミルクを嫌がる、極端に偏食がある」などの発達障害等の子どもの「育てにくさ」は乳幼児期から顕在化し、一般的な指導や支援では改善しないことも多いと指摘している。

申請者が取り組んできた調査(若手研究B:16K17476)においても、偏食傾向のある発達障害の子どもへの保護者の3割が対応に非常に困っており、「少し困っている」まで含めると8割に上る。さらに、3割強の保護者は周囲に「わがまま・好き嫌いで食べない」と言われて困ったことがある。このように、「食事の内容を考え、食事を作り、食べさせ、片付ける」保護者と「うまく食べられない」子どもは、「家庭で解決できず悩んでいる」「相談する内容かどうか判断に迷う」「相談したいが、どこに相談したらよいかわからない」などの理由から、相談・支援機関に繋がることができず、食の困難に対して親子とも長く苦しむ事態が明らかとなっている。発達相談等においても発達障害等の子どもの食の困難が保護者の不安・ストレスの要因として挙げられ、発達障害等の子どもの食の困難の実態や支援ニーズを丁寧に明らかにしていく必要がある。しかし、発達障害等の子どもと保護者が抱える食の困難と支援ニーズの実態を把握するための実証的研究は乏しい。

こうした問題解決に向けて、食に困難を有する子ども・保護者を孤立させず、エンパワメントしながら支えていくための「子ども・家族包括型の発達支援システム」の構築が肝要である。具体的には、乳幼児健診や育児相談等、子育ての早期の段階から、保護者が食の困難に伴う育児困難・ストレスを一人で抱え込まないように支援していくための早期介入システムであり、構築に向けて、子どもの食の困難に関わる多分野の専門家が協働していく相談・支援ネットワークの検討が求められている。

2. 研究の目的

2016~2018年度実施「発達障害児の『食の困難』の実態と発達支援に関する実証的研究」(若手B:16K17476)を発展させる本研究「発達障害等の子どもの食の困難と子ども・家族包括型発達支援システムの開発」は、対象の異なる5つの調査を通して、食べることに困難を有する子ども・保護者を孤立させず、両者をエンパワメントしながら支えていくための「子ども・家族包括型の発達支援システム」のあり方を検討することを目的とする。発達障害当事者の食の困難と支援を当事者の声から実証的に解明することは、国際的にも類のない開拓的研究である。

3. 研究の方法

本研究はコロナ禍の影響を受け、調査の内容や時期等に変更が生じたが、以下の4件の研究作業を行った。

- (1) 発達障害等の子どもの食の困難とその支援に関する研究動向の把握
- (2) 全国の児童発達支援センター等の管理栄養士・保育士等へのオンライン質問紙法調査
- (3) 中学生・高校生を対象にした食等の生活実態に関するオンライン質問紙法調査
- (4) 「子ども・家族包括型発達支援システム」先進国の北欧諸国における訪問調査

4. 研究成果

本報告では、諸外国における発達障害等の子どもの食の困難とその支援に関する研究動向を概観し、全国の全国の児童発達支援センター等の管理栄養士・栄養士・保育士等へのオンライン質問紙法調査やスウェーデンにおける食に困難を有する子どもの支援の訪問調査に関する成果の一部を報告する。

なお、調査等に関わる研究倫理上の手続きとして、個人情報保護法および所属大学の研究倫理規定を遵守し、回答者には事前に文書にて「調査目的、調査責任者・連絡先、調査結果の利用・発表方法、秘密保持と目的外使用禁止」について説明し、承認を得ている。

4.1 諸外国における発達障害等の子どもの食の困難とその支援に関する研究動向

ASD児は定型発達児に比べて高い割合で食物選択性、感覚処理の困難、口腔運動の困難、嚥下障害の症状などを有していることが国内外で報告され、感覚処理と摂食・嚥下の困難に特異性があることが明らかにされている(Wtwtら：2015、Seiverlingら：2018、Fieldら：2003、Bandiniら：2010、Suarez：2012、Nicole：2016)。ASDの食の困難に関連する要因(Hubbardら：2014)や、ASD当事者が有する食の困難と感覚調節障害との関連も指摘されている(Cermakら：2010、Suarez：2012、Kimら：2015、Strand：2020)。ASD児の摂食問題の多くは加齢とともに改善するが、長期的に深刻な摂食問題を抱える人も少なくないとの報告もある(Peverillら：2019、Kralら：2014、Kuschnerら：2015)。

ASD児の食の困難は家族にとって大きなストレス要因になっており(Curtinら：2015)保護者の「子どもに食事をさせるのが難しい」という声も多い。例えば食感・味の好み(カリカリまたは塩辛い食品のみを食べる)や特異な食行動(哺乳瓶やシッピーカップからのみ飲む)等が挙げられるが、これらの実際をふまえた研究は十分ではないとSchreckら(2006)は指摘している。そのなかでAdamsら(2020)は食の困難を有するASD児の保護者にインタビュー調査を行い、ASD児と家族の食事経験について詳細に記述している。ASD児の食の困難が保護者・家族の大きなストレス要因となっており、一緒に食事できないことは家族としてつながる機会の喪失と感じているとも述べている。

このような状況をふまえ、保護者に対する支援の重要性が指摘されている。保護者は不適切な摂食行動を防ぎ、感覚過敏症に対処し、家族の健康的な食生活のための継続的支援を求めており、地域の保健師や看護師は複雑な摂食行動に対処できる摂食クリニックに家族を紹介し、保健師がコーディネーターしながら心理士、高度実践看護師、登録栄養士(大学院レベルにおいて障害者など特別な対応が必要な者に対する専門教育を修めた栄養士)の連携・協働によって支援する必要があると述べている。Provostら(2010)によると、ASD児の食物選択性や食事の際の着席に抵抗したり、食べ物を投げたりするという食行動の困難に対する保護者の懸念は1歳以降に大幅に増加するが、発達の初期段階から定型発達児とは異なる食の困難を示すことは、小児セラピストが摂食を含む子育ての困難に早い段階で気づき、その評価を行って発達支援の介入を計画することに役立つと述べている。また、栄養等の支援にかかわる専門家はASD児の食事の良い面を把握し、家族が楽しい食事を体験できるように保護者や子どもを支援することも重要である(Locknerら：2008)。Adamsら(2020)の保護者インタビューでも、食に困難のあるASD児の保護者の40%が家族からのサポートの欠如を感じており、「家族の何人かは子どものことを理解しておらず、私を傷つける」「家族の中で私よりも子どものことを理解している人はおらず、母親として子どものルーチンに合わせて調整する必要がある、私だけが多くのことに直面している」と述べられている。サポートシステムがないことが保護者の感情的、社会的、心理的幸福に与える大きな影響を浮き彫りにし、保護者が否定的な感情を経験している場合は、さらにASD児へのサポートを低下させる可能性があるため、強力なサポートシステムの重要性を提起している。

以上のように、ASD当事者の有する食の困難と支援に関する研究は欧米諸国、アジア、オセアニア、アフリカ、イスラム諸国など世界各国で展開されており、地域や慣習、食文化を超えた共通の課題となっていることが示唆された。ASD当事者は感覚過敏・低反応等の感覚情報処理の困難やそれに伴う多様な身体症状を有しているが、そのことが食の困難としても大きく顕在化し、家庭・学校・社会生活における本人と家族のQOLの困難にも影響していた(Kuschnerら：2015)。

ASD当事者の食の困難・支援ニーズに関する検討は、医学、病理学、栄養学、心理学など多領域の研究アプローチによって国際的に重要な基礎データが徐々に蓄積されつつあるが、対象者の少ない調査・臨床報告も多く、また調査対象は若干の当事者調査研究があるものの大半が保護者である。ASD当事者が抱える食の困難とその背景にある感覚過敏・低反応等の感覚情報処理の困難やそれに伴う多様な身体症状、ASD当事者が日常生活において直面する不安・恐怖・ストレス等の困難や支援ニーズの全体像を把握するための実証的研究は緒についたばかりである。

Foxら(2018)は、食物選択性は理解されにくい現象であるが、食の困難を有する当事者を「自分の経験の専門家」と捉えて、当事者の語ることを丁寧に傾聴することが、この問題を解明するための出発点として最適なアプローチであると述べている。人が生きる上で不可欠な「食べる」行為への合理的配慮と QOL の向上をめざすことは基本的人権の保障でもあり、そのためには当事者の抱える食の困難・支援ニーズの傾聴と当事者を交えた対応・支援策の検討が不可欠である。

4.2 全国児童発達支援センター等の管理栄養士・保育士等へのオンライン質問紙法調査

本研究は、全国の児童発達支援センターにおいて食に関する困難を有する親子の相談を受ける職員(管理栄養士・栄養士、保育士等)への質問紙法調査を通して、児童発達支援センターにおける就学前後の子どもと保護者の食の困難への対応の実態を把握し、食べることに困難を有する子ども・保護者を孤立させず、エンパワメントしながら支えていくための課題を検討した。

調査の概要を記す。全国の児童発達支援センターにおいて就学前後の子どもの食の困難に関する相談に対応する職員(管理栄養士・栄養士、保育士等)を対象に、Google フォームによる質問紙法調査を実施した。全国の児童発達支援センター479 施設に依頼を行い、107 施設から回答を得た(22.3%)。調査内容は、児童発達支援センターにおける食に関する業務や相談対応の体制、相談内容と発達支援の状況、保育施設や学校等との連携に関する項目である。調査期間は2021年11月~2022年2月である。回答者は「管理栄養士・栄養士」23人21.5%、「保育士」28人26.2%、「理学療法士」4人3.7%、「社会福祉士」3人2.8%、「言語聴覚士」4人3.7%等である(n=107人)。施設機能は「福祉型」91施設88.3%、「医療型及び福祉型」11施設10.7%、「医療型」1施設1.0%である(n=103施設)。

本調査の結果、本調査における児童発達支援センターへの子どもの食の困難に関する相談内容は、極端な偏食、食物アレルギー、少食・過食、異食が多く、田部・高橋(2019)の発達障害等の子ども・保護者調査と同様の傾向であった。幼児に関する相談が最も多かったが、就学児の相談も一定数表れていることから、幼児期を過ぎても困難が表れ続け、乳幼児期における困難が改善されずに固定化したり、新たに困難を有する子どもが少なくないことが推察される。幼児期からの食の困難への適切な対応が不可欠であり、早期からの支援・介入が必要である。また、子どもの偏食等の食に関する困難は保護者の不安・ストレス要因になり、家庭内での困難も多いことが児童発達支援センターへの相談内容からも明らかになった。田部・高橋:(2019)は「相談する内容かどうか判断に迷う」「相談したいがどこに相談したらよいかわからない」ため相談・支援機関と繋がることができている保護者の存在を明らかにしているが、本調査では「保護者からの直接相談」を主な把握方法としており、相談・支援に辿り着けない保護者も多いことが推察される。他機関・多職種との連携によって食の困難を有する親子と相談・支援機関とを繋ぐ仕組みや関係者の専門性向上が必要である。

4.3 「子ども・家族包括型発達支援システム」先進国の北欧諸国における訪問調査

近年、日本では DSM や ICD の摂食障害基準ではとらえきれないような非定型の特徴をもつ者も目立ってきており(日本小児心身医学会摂食障害WG:2008、宮本:2009、作田:2016)、これと発達障害や食物選択性との関連も指摘されている。

イギリス・ロンドン州立小児専門病院(Great Ormond Street Hospital)のLaskほか(2013)は小児の摂食障害を9つに分類したGreat Ormond Street Criteria(GOSC)を提案し、子どもの摂食障害では、極端な偏食をする「選択摂食」、嘔吐するのが怖くて食べられない「嘔吐恐怖症」なども分類記載し、さらに「痩せたいわけではないがなぜか食べる気にならない」という「食物回避性情緒障害」が約30%を占めることも明らかにしている。摂食障害の治療において、イギリスの国立医療技術評価機構NICE治療ガイドラインは国際的に評価が高く、参照されている。

日本小児心身医学会「摂食障害ワーキンググループ」による小児の摂食障害の分類では、GOSCとDSM-5を合わせたものに、機能的嘔吐症(心因性嘔吐)を追加した14種類に分類されている。機能的嘔吐症(心因性嘔吐)は、生きづらさから「身体的には食べられるのに食べられない」精神的な摂食障害であり、厚生労働省では「中枢性摂食異常症」と呼ぶ。「食物回避性情緒障害」は、学校の給食で完食を強要されたことや胃腸炎のときに嘔吐し嘔吐恐怖が出現したことなどをきっかけに、食べ物が喉を通らずやせが進行してしまう食物摂取を回避する病型である。DSM-

ではこの項目を摂食障害に統合し、異食症や反芻症とともに回避・制限性食物摂取症(avoidant/restrictive food intake disorder, ARFID)という概念となって初めて記載された。年齢制限(6歳以下の発症)の削除に加え、GOSCに含まれる診断分類(食物回避性情緒障害、選択的摂食、機能的嚥下障害など)が取り込まれた。また、食欲不振で小児科を受診する子どもは少なくないため、子どもの摂食障害の分類に「うつによる食欲不振」を含めていることや子どものうつ病はわかりにくく「胃腸炎」の診断をされることも少なくないことを指摘している。

以上のような摂食障害を含めた摂食困難のある子どもの支援においては、子ども本人のみならず家族にとっても大きな困難であり、本人と家族を包括した支援、教育・医療・福祉・当事者組織等の地域連携システムにおける長期的発達支援が不可欠である。

そこで日本大学・高橋智を代表として筆者らは2019年9月にフィンランドの摂食障害治療の基幹であるヘルシンキ大学病院精神科摂食障害ユニットを訪問し、看護師長へのインタビュー調査を実施した。同時期に、摂食障害専門ケアセンター「Syömishäiriökeskus」を訪問し、看護師へのインタビュー調査を実施した。本研究では、ヘルシンキ大学病院精神科摂食障害ユニット

と摂食障害専門ケアセンターの調査を通して、摂食障害の子ども・若者と家族の支援の状況を明らかにし、摂食障害の早期発見と本人・家族を孤立させない発達支援のあり方を検討した。

摂食障害の治療において本人のみならず家族やパートナーも含めて、患者本人の抱える病気や心理・社会的困難、対人関係等における不安等を理解し、エンパワメントしていく包括的ケアの重要性が明らかになった。本センターでは摂食障害をさらに早期に発見し、早期に治療や支援を開始していくために、ネウボラや家族センターからの情報提供・連携の必要性を訴えている。摂食障害を発症しているということは、摂食障害以外にも何らかの心理・社会的不安や心身の課題・困難を抱えている場合がほとんどと考えられ、児童虐待・うつ・発達障害等の背景要因も含めた総合的な治療が不可欠であると考えられていた。

以上の調査研究等を通して、食に困難を有する子ども・保護者を孤立させず、エンパワメントしながら支えていくための発達支援の構築が肝要であることが明らかになった。乳幼児健診や育児相談等、子育ての早期の段階から、保護者が食の困難に伴う育児困難・ストレスを一人で抱え込まないように支援していくためには、児童発達支援センターをはじめ、子どもの発達と食の困難に関わる多分野の専門家が協働していく相談・支援ネットワークの検討が緊要の課題であることが確認された。

【文献】

- Adams, S.N., Verachia, R. & Coutts, K. (2020) A blender without the lid on': Mealtime experiences of caregivers with a child with autism spectrum disorder in South Africa, *South African Journal of Communication Disorders*, 67, n.1.
- Cermak, S.A., Curtin, C. & Bandini, L.G. (2010) Food Selectivity and Sensory Sensitivity in Children with Autism Spectrum Disorders, *Journal of the American Dietetic Association*, 110(2), pp.238-246.
- Curtin, C., Anderson, S.E., Must, A. & Bandini, L. (2010) The prevalence of obesity in children with autism: a secondary data analysis using nationally representative data from the National Survey of Children's Health, *BMC Pediatrics*, 10, Article number: 11.
- Curtin, C., Hubbard, K., Anderson, S.E., Mick, E., Must, A. & Bandini, L.G. (2015) Food Selectivity, Mealtime Behavior Problems, Spousal Stress, and Family Food Choices in Children with and without Autism Spectrum Disorder, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 45, pp.3308-3315.
- Fox, G., Coulthard, H., Williamson, I. & Wallis, D. (2018) "It's always on the safe list": Investigating experiential accounts of picky eating adults, *Appetite*, 130, pp. 1-10.
- Hubbard, K.L., Anderson, S.E., Curtin, C., Must, A. & Bandini, L.G. (2014) A Comparison of Food Refusal Related to Characteristics of Food in Children with Autism Spectrum Disorder and Typically Developing Children, *Journal of the Academy of Nutrition and Dietetics*, 114(12), pp.1981-1987.
- Kral, T.V.E., Souders, M.C., Tompkins, V.H., Reniker, A.M., Eriksen, W.T. & Pinto-Martin, J.A. (2014) Child Eating Behaviors and Caregiver Feeding Practices in Children with Autism Spectrum Disorders, *Public Health Nursing*, 32(5), pp. 488-497.
- Lask, B. & Vaughn, R.B. (2013) Overview of eating disorders in childhood and adolescence. *Eating Disorders in Childhood and Adolescence* 4th ed, Routledge; 33-49.
- Lockner, D.W., Crowe, T.K. & Skipper, B.J. (2008) Dietary Intake and Parents' Perception of Mealtime Behaviors in Preschool-Age Children with Autism Spectrum Disorder and in Typically Developing Children, *Journal of the American Dietetic Association*, 108(8), pp.1360-1363.
- 宮本信也 (2009) 小児の摂食障害: 小児科における診療実態: 神経性食欲不振症を中心に (<特集> 小児をめぐる心身医学), 『心身医学』 42 巻 12 号, pp.1263-1269.
- 日本小児心身医学会摂食障害WG (2008) 多施設共同研究「摂食障害グループ」神経性無食欲症に関する調査報告診療状況および二次調査, 『子どもの心とからだ』 17 巻, pp.69-72.
- Peveilli, S., Smith, I.M., Duku, E., Szatmari, P., Miranda, P., Vaillancourt, T., Volden, J., Zwaigenbaum, L., Bennett, T., Elsabbagh, M., Georgiades, S. & Ungar, W.J. (2019) Developmental Trajectories of Feeding Problems in Children with Autism Spectrum Disorder, *Journal of Pediatric Psychology*, 44(8), pp. 988-998.
- Provost, B., Crowe, T.K., Osbourn, P.L., McClain, C. & Skipper, B.J. (2010) Mealtime Behaviors of Preschool Children: Comparison of Children with Autism Spectrum Disorder and Children with Typical Development, *Physical & Occupational Therapy In Pediatrics*, 30(3), pp.220-233.
- 作田亮一 (2016) 子どもの摂食障害の治療 早期発見と治療のための診療体制構築 (特集 1・子どもの摂食障害) 『教育と医学』 第 64 巻 3 号, pp.184-194.
- Schreck, K.A. & Williams, K. (2006) Food preferences and factors influencing food selectivity for children with autism spectrum disorders, *Research in Developmental Disabilities*, 27(4), pp. 353-363.
- Strand, M. (2020) Eggs, sugar, grated bones: colour-based food preferences in autism, eating disorders, and beyond, *Medical Humanities*.
- Suarez, M.A. (2012) Sensory Processing in Children with Autism Spectrum Disorders and Impact on Functioning, *Pediatric Clinics*, 59(1), pp.203-214.
- 田部 絢子・高橋 智 (2019) 『発達障害等の子どもの食の困難と発達支援』 風間書房。
- 田部 絢子・高橋 智 (2020) スウェーデンにおける摂食障害と「子ども・家族包括型発達支援」の課題: 摂食障害センターおよび摂食障害当事者組織の訪問調査から, 『東京学芸大学紀要総合教育科学系』 第 71 集, pp.161-175.
- Wtwt, E.T. & Farhood, H.F. (2015) Feeding Problems and Nutritional Assessment in Children with Autism, *Karbala Journal of Medicine*, 8(1), Pages 2172-2186.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高橋智・田部絢子・内藤千尋・石川衣紀・能田昂・石井智也・池田敦子・柴田真緒	4. 巻 1
2. 論文標題 コロナ禍における子どもの生活実態と支援ニーズ 全国の小中高校生調査から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Society5.0に対応する学校教育に関する基礎的研究 日本大学文理学部人文科学研究所共同研究	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 能田昂・田部絢子・石井智也・石川衣紀・内藤千尋・池田敦子・柴田真緒・高橋智	4. 巻 84
2. 論文標題 新型コロナウイルス後遺症（Long COVID）と子どもの発達困難・リスクに関する研究動向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 尚絅学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田部絢子・高橋智	4. 巻 28
2. 論文標題 コロナ禍における子どもの食の困難・リスクに関する動向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 136-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 124. 田部絢子・坂口めぐみ・柴田真緒・高橋智	4. 巻 14
2. 論文標題 高校生における食・睡眠の困難と心身の不調 高校生調査から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 73-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂口めぐみ・田部絢子・柴田真緒・高橋智	4. 巻 27
2. 論文標題 中学生における食・睡眠の困難と心身の不調 中学生調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 118-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田部絢子・高橋智	4. 巻 27
2. 論文標題 自閉スペクトラム症と食の困難に関する研究動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 147-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田部絢子・高橋智	4. 巻 13
2. 論文標題 フィンランドにおける子ども・若者の摂食障害と支援の動向 ヘルシンキ大学病院精神科摂食障害ユニットと摂食障害専門ケアセンターの訪問調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 125-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・池田敦子・石井智也・柴田真緒・能田昂・田中裕己・高橋智	4. 巻 13
2. 論文標題 スウェーデンの就学前学校におけるアレルギー対応支援 マルメ市の「アレルギー専用就学前学校」への訪問調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋智・田部絢子	4. 巻 第6754号
2. 論文標題 好きな食べものに固執する 高校生の「食」の現状と発達支援の課題（下）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『内外教育』時事通信社	6. 最初と最後の頁 pp.12 -15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋智・田部絢子	4. 巻 第6753号
2. 論文標題 高校生36.6%が「欠食が多い」 高校生の「食」の現状と発達支援の課題（上）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『内外教育』時事通信社	6. 最初と最後の頁 pp.10 -13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田部絢子・高橋智	4. 巻 第71集
2. 論文標題 スウェーデンにおける摂食障害と「子ども・家族包括型発達支援」の課題：摂食障害センターおよび摂食障害当事者組織の訪問調査から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東京学芸大学紀要．総合教育科学系』	6. 最初と最後の頁 pp.161-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 能田昂・田部絢子・石井智也・高橋智
2. 発表標題 新型コロナウイルス後遺症（Long COVID）と子どもの発達困難に関する議論の動向
3. 学会等名 日本教育学会第81回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田部絢子・内藤千尋・石井智也・柴田真緒・石川衣紀・能田昴・池田敦子・高橋智
2. 発表標題 コロナ禍における障害・疾病等を有する子どもの発達リスクと発達支援に関する国内外の動向
3. 学会等名 日本教育学会第81回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 成田妙子・田村文誉・山田裕之・田部絢子・高橋智・田中祐子・水上美樹・菊谷武
2. 発表標題 0歳から1歳半児の保護者における子どもの口腔機能発達に関する主観的評価
3. 学会等名 第28回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田部絢子・高橋智
2. 発表標題 コロナ禍における子どもの「生活と発達」の危機と発達支援に関する国内外の動向（その1） 子どもの食の困難を中心に
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田部絢子・坂口めぐみ・柴田真緒・高橋智
2. 発表標題 現代の高校生が抱える食・睡眠の困難と心身の不調の実態 高校生調査から
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育学会第27回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂口めぐみ・田部絢子・柴田真緒・高橋智
2. 発表標題 現代の中学生が抱える食・睡眠の困難と心身の不調の実態 中学生調査から
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育学会第27回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田部絢子・高橋智
2. 発表標題 的障害児の食の困難と発達支援に関する研究動向
3. 学会等名 日本発達神経科学会第9回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・石井智也・能田昴・柴田真緒・池田敦子・田中裕己・高橋智
2. 発表標題 スウェーデンにおける子どもの摂食障害と発達支援 摂食障害センター・摂食障害当事者団体への訪問調査から
3. 学会等名 日本発達神経科学会第8回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田部絢子・高橋智
2. 発表標題 発達障害等の子どもの食の困難と「子ども・家族包括型発達支援システム」に関する研究動向
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育学会第25回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・石井智也・能田昂・柴田真緒・池田敦子・高松健太・田中裕己・高橋智
2. 発表標題 スウェーデンにおける子どもの摂食障害と当事者支援 当事者組織「FRISK&FRI」の訪問調査から
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・石井智也・能田昂・柴田真緒・高橋智
2. 発表標題 スウェーデンの就学前学校におけるアレルギー対応支援 マルメ市の「アレルギー児専用就学前学校」への訪問調査を通して
3. 学会等名 日本育療学会第23回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田部絢子・高橋智
2. 発表標題 現代の高校生の「食」の現状と発達支援の課題 高校生の声に探る
3. 学会等名 日本教育学会第78回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 田村文誉・水上美樹編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 159
3. 書名 ダウン症の子どもの摂食嚥下ハビリテーション(担当:分担執筆、第1編第3章、pp.12-18, 範囲:高橋智・田部絢子「感覚過敏等の発達特性を有する子どもの食の困難と発達支援」)	

1. 著者名 あまこようこ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 127
3. 書名 食べないっ子もいただきます！うちのやさしいかいじゅうごはんレシピ（解説：田部絢子「Part 4：食事の「こまった」を解決：子どものごはん支度が楽になる5つの視点」）	

1. 著者名 あつくん作・高橋智監修（取材協力：田部絢子）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 世音社	5. 総ページ数 31
3. 書名 あつくんはたべられない 食の困難と感覚過敏（増補改訂版）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 智 (takahashi satoru) (50183059)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	田村 文誉 (tamura humiyo) (60297017)	日本歯科大学・生命歯学部・教授 (32667)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大高 美和 (ohtaka miwa)	NPO法人ゆめのめ・代表	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------